

札幌大学総合論叢 第38号 (2014年10月)

〈研究ノート〉

ノディングズによるケアリング論の拡張 —「道徳の指導法」の基盤に関する一考察—

田 原 宏 人

1

2014年現在、マスコミ等で報じられているように、道徳の「教科化」へ向けての具体化作業が急ピッチで進行している。「道徳の時代が来た!」「道徳の時代をつくる!」は、道徳教育の充実に関する懇談会の副座長を務め、現在は中央教育審議会の道徳教育専門部会で主査を務めている押谷由夫が中心となって相次いで世に出した編著書のタイトルである(押谷・柳沼編著 2013, 2014)。この国に満ちようとしている空気感をそのタイトルが、そして教科化推進者たちの抑えがたい昂揚感を末尾の感嘆符が端的に物語っている。

この問題をめぐる最近の動向を手短かにまとめてみよう。

- ・首相官邸に設置された教育再生実行会議が「いじめの問題等への対応について(第一次提言)」(2013年2月26日)において、道徳教育の「教科化」を謳う
「子どもが命の尊さを知り、自己肯定感を高め、他者への理解や思いやり、規範意識、自主性や責任感などの人間性・社会性を育むよう、国は、道徳教育を充実する。そのため、道徳の教材を抜本的に充実するとともに、道徳の特性を踏まえた新たな枠組みにより教科化し、指導内容を充実し、効果的な指導方法を明確化する。その際、現行の道徳教育の成果や課題を検証するとともに、諸外国における取組も参考にし、丁寧に議論を重ねていくことを期待する。」
- ・文部科学省に「道徳教育の充実に関する懇談会」を設置(2013年4月～12月)
「今後の道徳教育の改善・充実方策について(報告)～新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために～」(2013年12月26日)
- ・文部科学大臣諮問「道徳に係る教育課程の改善等について」(2014年2月17日)
「道徳教育専門部会」(<教育課程部会<初等中等教育分科会<中央教育審議会)を

設置して審議中（2014年4月～）

- ・ 文部科学省が、道德教育用教材「心のノート」を全面改訂した「私たちの道德」を全国の小中学校に配布（2014年4月）
- ・ 道德教育専門部会が第8回（2014年8月7日開催）において「審議のまとめ骨子（案）」を提示
 - 道德の時間を「特別の教科 道德」（仮称）として位置づけ、あわせて検定教科書を導入する
 - 道德教育の「最終的な目標」を、「児童生徒の「道德性」の育成であることをより明確に示す簡潔な表現に改める」
 - 評価の具体的なあり方としては、指導要録に新たに記述式の欄を設け、数値などによる評価は行わない、など

このように、道德教育が（政策）課題として急速に浮上しつつある状況を踏まえつつ、本稿は、マイケル・スロート（Michael Slote）が展開する道德感情主義（moral sentimentalism）の主要な背景理論の一つであるネル・ノディングズ（Nel Noddings）のケアの倫理を検討する。

2

スロートは、キャロル・ギリガン（Carol Gilligan）やノディングズ（Nel Noddings）のケアの倫理やヒュームの感情主義から想を得つつ、規範倫理学とメタ倫理学を含む包括的な道德理論の構築をめざしており、合理主義的・カント主義的・ロールズ主義的な道德理論を対抗理論としている。（ネオ）アリストテレス派の徳倫理学も合理主義陣営に配置される。対照的に、感情移入（empathy）という最重要概念をはじめとして、ヒュームに負うところはきわめて大きい。

この道德感情主義あるいはケアの倫理と、わが国の道德教育をめぐる状況とは、以下に述べるように、接点をもっている。

一つは、「道德の指導法」と、その中心に位置する教材にかかわる。「心のノート」にしり、その全面改訂版を謳う「私たちの道德」にしり、内容は、イラストにコピーを添え、教訓的な読み物資料を挟むという構成をとっている。イラストとコピーが「心」に訴えるという効果をねらっていることはもちろんだが、読み物資料のほうも、いわゆる「美談」が多い。美談の主人公は合理的計算をあえて無視して行動する。「教科化」を先取りして発行

されている道德「教科書」類にもこの種の教訓話が満載でされているし、政府の教育再生実行会議の提言にも、「学校における道德教育の教材として、具体的な人物や地域、我が国の伝統と文化に根ざす題材や、人間尊重の精神を培う題材などを重視する」よう明記されている。

わが国の道德授業における「感性面の強調」はなにも今に始まったことではない。林泰成は、わが国の道德教育の「実情」を、「感性面での耕しを方法として用いながら、徳目についての知識を伝達している」と描き、「この方法としての感性面の強調」を、「ケアリング的な試み」としてとらえている（林 2006: 17）。また、「ある徳目を教えるために作られた資料でも、そこにケアリング的な発想を見出すことができる。なにが正義かと考える場面でも、心情的な共感やそれに基づく許しが美談として語られたりする」とも指摘している（同前: 18）。

「心に届く指導方法」（教育再生実行会議）が確立され、普及させられようとしているこの状況を、評価するというよりは、分析的に把握するための一助として、スロートの議論に着目してみたい。

二つめは、林が分析を加えているわが国の道德教育の「実情」とは相対的に独立しており、むしろ現場に指針を示す役回りにある教育アカデミズムの事情にかかわる。ノディングズの提唱するケア（ケアリング）が、程度の差はあれ、広く肯定的に（もちろん例外もあるが）受けいれられてきており、ノディングズをわが国に紹介したひとりであり、斯界に大きな影響力をもつ佐藤学は、彼女へのインタビュー（Noddings 1992 の訳書（2007）の末尾に補章として収録されている。インタビューの日付は 1998 年 12 月）のなかで、「ケアリングの倫理学は……人の感情や情動から出発します」とその基本的な思考法の特徴を押さえたうえで、次のように述べている。

あなたは、ケアリングの本質的な要素は、ケアする人とケアされる人との関係であると述べられています。日本では……教師の授業も親の子育ても、この関係をつむぐ活動を基盤としています。あなたのケアリングの考え方は、日本人の心にはなじみやすいものです。（ノディングズ 2007: 325）

では、このケアの倫理は教科化推進論のいう上述の「心に届く指導方法」といかなる関係に立つのだろうか⁽¹⁾。さらに、ノディングズによれば、ケアリング関係の成否は、狭義の道德教育のみならず、教育関係が成立するか否か、したがって教育が成功するか否かの鍵である。

3

ケアリング論との位置関係に関連してスロートが発した次の問いから始めよう。

だが、個人的および政治的な道德性の全域を理解することに成功しようとしても、ケアの倫理はなお次のことを理解する必要がある。すなわち、どうすれば広域的な倫理的諸問題を気にかける（care about）ことができる（ようになる）のか、そして、そのように気にかけることが、身近の大切な人や自分のキャリアや慰安や安心に対するわれわれのごく普通の、もしくは日常的な関心とどのように調和するのか。（Slote 2010b: 126）

この課題提示の延長線上に感情移入が鍵概念として出てくるのだが、ここでは、ノディングズによるケアリング論の拡張の経緯を振り返ることに重きを置きたい。というのも、この拡張問題は、結果的に彼女のケアリング論の変遷の軸となっており、その主張を理解するのに有用とみなされるからである⁽²⁾。中心的な論点となるのは、世話（caring for: 直接的・対面的に世話すること：以下、‘caring for’，‘care for’を CRfor と略記する）と気遣い（caring about: 遠くの見知らぬ人々を気にかけること：以下、‘caring about’，‘care about’を CRfor と略記する）との区別と、その取り扱いである。

1984 年の著作『ケアリング』の後半部は、危ない例え話が目白押しである。1992 年の著書のなかで、ノディングズ自ら「多くの読者を困惑させた」として弁明している⁽³⁾。オリジナルの該当箇所を引用しておく（Noddings 1984 [1997]: 112 [175]）。

私は「CRabout」を無視してきたし、それでよいと信じている。それはあまりにも容易に行うことができる。私は、カンボジアの飢えた子供たちを「CRabout する」ことができるし、飢餓救援基金に 5 ドルを送金することができるし、いくぶんかの同情を感じることもできる。しかし、私は、自分が送った金が、食糧の購入にあてられるのか、あるいは銃の購入に使われるのか、それとも政治家がキャデラックの新車を購入費に消えるのか知ることすらない。これはケアにとってできの悪い又従兄弟である。「CRabout」はいつでもある程度、やさしく見て見ぬふりをする。気を遣うのはちょうどどこまでである。協賛の熱意もこれくらいまでである。承認し、賛同し、5 ドル献金したら、そのあとは関心は他に移る。

とにかく、ノディングズの真意は、「距離のある所でのケアについて学ぶことの大半は、その困難と限界について理解すること」だという点にあり、その困難とは、「第一に、私たちはケアされる人の面前に実際にいることができず、それゆえケアリングが完成したのかどうか確かめることができない。第二に、その人の痛みを緩和する責任があると私たちが感じている人に対し、苦しみを与えてしまうかもしれない」の二つである (Noddings 1992[2007]: 112, 113 [210, 212])。言い換えれば、正確な情報収集の現実的困難性と、抽象的なことばによって正当化される行為のもたらす意図されざる結果の予測不能性である。

このように、ノディングズの初期のケアリング論は親密圏内で閉じている。その含意は、『ケアリング』の「日本語版への序文」(1997)によれば、「喜んでケアしようとする—そしてケアできるほど親密な—人びとが実際にそれができるような諸条件を確立し、維持することを目指して、わたしたちが運動すべきだ」というところにある (Noddings 1984[1997]: - [iii])。

4

しかしながら、自らのケアリング論に対して寄せられる偏狭主義との批判に対して、ノディングズは問もなく、自説の修正というかたちで応じることになる。たとえば、1999年のアメリカ教育哲学会のセッションにおけるスロートの報告への応答において、ノディングズは、前言を撤回し、誤り (my own error) を認めて次のように述べている。

私は、「CRabout」に対してあまりにも少ない注意しか向けなかったのは誤りであった、と今では考えている。……

依然として、「CRfor すること」と「CRabout すること」との基本的な区別は正しいと確信しているし、当時 (=『ケアリング』執筆時) の私の意図は、「CRfor すること」の特別な性質を強調することにあった。「CRabout」は、政治的な独り善がりへと転落し、善よりも害を為す諸々の形態の介入へと劣化しかねない。……しかし、「CRabout」は、正義の基盤となる可能性がある。全人類、直接話しかけられたことがない人、遠く離れた所にいる見知らぬ人を「CRfor する」ことは物理的に不可能である。それでもやはり、ケアの態度を身につけているときには、苦しんでいるどんな人に対しても、その人のために何かを為すよう駆り立てられる感じがする。「CRabout」は正義感覚 (sense of justice) となる。それは重要であ

り、しばしば、われわれに利用可能な唯一の形態のケアリングである。しかしながら、わたしが CRabout を道徳的に重要だとみなすのは、それが、「CRfor すること」が花開く条件を確立するにさいしての道具となるからである。他者において完結するということをこのように強調することがケア理論の核心であり、そしてまた、そのことは、関係性に現在置いている重点に関しては譲歩しないだけの理由を示唆している (Noddings 1999: 36)。

この観点は、「ケアリングと社会政策」を副題にもつ 2002 年の著書へと引き継がれ、今日に至っている⁽⁴⁾。こうしたノディングズのアプローチは、川本隆史によって、「正義とケアを二項対立させるのではなく、後者を二つに分割した上で、正義とケアの相互作用を見極めようとする」(川本 2004: 25) ものとして高く評価されている。

ここで、先にスロートがケアの倫理の課題として挙げた問いにつながる。すなわち、「広域的な倫理的諸問題を CRabout することができる (ようになる)」方法の問題、そして、そうした CRabout と身近な日常的な関心との調和の問題である。この問いかけに対するノディングズの答えは、良くも悪くもナイーブであるように思われる。

CRabout は、われわれを対面的世界から、より広い公共的領域へと連れて行く。もしも、しかるべく CRfor されてきており、数少ない親密な他者を CRfor することを習得しているならば、われわれは、他者への仲間意識をもって公共的世界へと入っていく。

.....

ケアの理論の核心にある鍵は次のとおりである。すなわち、CRabout (あるいは、ひょっとしたら、正義感覚) は、CRfor が花開くことのできる条件を確立するに際しての道具とみなされなければならない、ということである。好ましいケアリングの形態は CRfor であるけれども、CRabout は、それを確立し、維持し、増進することを援助することができる。正義感覚をもって他者を CRabout する人々は、確実にケアリングが実際に起こるようにすることが目的なのだということを心に留めておかなければならない。CRabout は、もしそれがケアリング関係に帰着しないならば、空虚である。(Noddings 2002: 22, 23 - 24)

理解できる範囲で整理してみよう。

まず親密圏で CRfor を習得

→ 公共圏で CRabout

→ CRabout がケアリング関係に帰着

→ CRfor が花開く（親密圏で）

いわれているケアリング関係とは次のような関係を指している（Noddings 2002: 19）。

関係（A, B）は、次の場合、かつその場合に限り、ケアリング関係（もしくは出会い）にある。

- i A が B をケアする。すなわち、A の意識が注意や動機づけの転移（motivational displacement）⁽⁵⁾ によって特徴づけられており、かつ、
- ii A が i) に従って何らかの行為を行っており、かつ、
- iii A が B をケアしていると、B が認識・承認（recognizes）している。

これを踏まえるなら、CRabout が行われる空間において、ケアリング関係が結ばれることはありえない。とくに iii) は CRabout の定義に反する。すなわち、CRabout が遠く離れた所にいる見知らぬ人々と関係である以上、CRabout される人がケアする人を認識・承認することは不可能である。だが、はたして、相手が物理的もしくは情報的に、そうだと認識することが困難・不可能であるような行為は道徳的に「空虚」なのだろうか。

いずれにせよ、論理的にも時間的にも「CRfor が CRabout に先行する」。しかしながら、CRabout はそれ自体が目的ではない。あくまでも「道具」である。CRfor が「花開く（fourish）条件」を確立するにさいして、CRabout が「道具」となる、とはいったいどういうことなのだろうか。

5

ノディングズの『ケアリング』は、1984年に初版が出た後、2003年版と2013年版が出ている。「ケアリング（私が描いたそれ）は偏狭である。家庭と小さな共同体にこだわりすぎている」という初版に向けられた批判に対して、2003年版の序文のなかで、すでに2002年の著書 *Starting at Home* において訂正した（「CRabout が正義を動機づける基

盤と考えられうるということ、そして、CRfor を行使することが実際には (logistically) 不可能である場合には、われわれは正義を活用する必要がある」と述べた後、次のような但し書きを付け加えている (Noddings 2003: xxiii – xxiv)。

CRfor が実際に生じる条件を、われわれの努力が産み出しているかどうか、見届けないならば、CRabout も正義とともに流産しかねないであろう。CRfor は、それによって多くの人々が CRabout するようになる手段であるとともに、CRabout によって達成されるべき目的でもあるのだ。

2013 年版の「あとがき」では、そのような CRabout のあるべき (空虚でない) 姿が示唆されている。たとえば、比較的小規模な非政府組織の活動が有望な徴候のひとつとして挙げられている。ポイントは、援助の必要性を表明している人々によって表明されたニーズに応じて活動するという点にある。すなわち、受け手に「真のニーズ」を語ってはならない。「根本的に重要なのは対話であり、計画全般も日々の活動も対話が導くのである」。CRabout は、「それが意識的・知的に CRfor を支える場合に、その本務を遂行する」とされる (Noddings 2013: 207)。

「偽物でない (genuine)」CRabout に課せられるこの要件をかなえることは、政府間 (外交レベル) になるとかなり大変になる。「社会科学やさまざまな形態の諜報活動をつうじて彼ら [= われわれの友と敵] に関する情報を蒐集するだけでは十分ではない。どのレベルで外交に携わる人々も、認知的感情移入 (cognitive empathy)⁽⁶⁾ を実践することに習熟していなければならない」。ここで「敵」とは「正義や道徳性についてわれわれ [= 西洋リベラル民主主義の住人] と見解をともしない人々」を指している。重要なのは、「ケアリング関係を維持すること、言い換えれば、コミュニケーション回路を開いたままにしておき、つねにケアする準備を整えていること」である (ibid.)。

こうした CRabout を介したケア倫理の守備範囲の拡張は、「正義へのケア駆動アプローチ (care-driven approach to justice)」と命名され、2010 年の著作 *The Maternal Factor* で展開されている。ケア駆動アプローチとは「権利」ではなく「ニーズ」を基礎としたアプローチのことであり、「正義」と呼ばれる体系は、それ通じて「われわれの CRabout が他者のニーズに有効に対応する」ことができるようなそれを指している。「ケア駆動の正義の体系にあつては、正義の意味に関してわれわれと見解が一致しない人々を隔てるようなこと」にはならず、むしろ、双方が受け入れ、合意に到達することができるような「正義の概念を鍛え上げる」ことが課題となる。このこととかがわって、このアプ

ローチの「第一歩は、コミュニケーションの回線を確立すること、すなわち、表明されたニーズに注意深く耳を傾け、これらの人々が正義をどのように想い描いているかを学ぶことである」とされる (Noddings 2010a 91 – 93)。

ところで、権利が主役を張る西洋リベラル民主主義の正義を共有しない人々がいるということ認めるならば、ニーズを基礎とするケア駆動の正義に対しても同じことが指摘されるのではないかという疑問が、当然のことながらわいてくる。端的には、ニーズをいかに同定し、解釈するかという問題である。

6

前節末の問いに答えるために必要な範囲で、*The Maternal Factor* の論旨をたどってみることにしよう。

母子関係に認められるとされるケアリング関係の原型は、自然的ケアリングと呼ばれている。「原初の (original) ケアリング関係は選択されない。それは生起する (happen)。」「自然的ケアリングが『自然的』であるのは、形式的な道徳的思想に先立って存在するという意味においてである。それはそこに、経験的な世界のなかにある」(Noddings 2010a 44,45. 強調は原文、以下同じ)。とするならば、そもそも、「ニーズを同定し、しかるのちそれらのニーズをかなえるべくケアに従事する」という問題ではない。ケアリングはニーズの同定に先行するのである。したがって、「理想的には」、ノディングズにしてみれば「現実主義的には」、ニーズを同定し充足させる場合の第一歩は、自然的ケアリングの諸条件を確立することである。「こうしたケアリングのコミュニティが確立されていない」場合には、「善き意図をもった援助者たちが馬鹿げたことをやらしかねない」(ibid.: 181, 184) ⁽⁷⁾。

要するに、「ニーズは、ケアリングのサークルの内部において、もっともよく同定され解釈される」。であるからには、ニーズへのアプローチを根本的に変更する必要がある。すなわち、「妥当な優先順位をつけて諸々のニーズにのリストを編纂したり、功利主義的な思考が不可避免的にもたらしかねない災難から功利主義を救出したりする」代わりに、「現存するケアのコミュニティを、いくらかでも大きなものへと拡張すること、われわれが―見知らぬ人々として―責任をもって参加する自然的ケアリングの現地センター (on-sitecenters) を見定めることに集中すること」である (ibid.: 185 – 186)。

ケアリング・コミュニティ (あるいはサークル) へのこうしたこだわりが偏狭主義を助長するという批判をノディングズは甘受する。しかし、「こうした結果を招いているのは

ケアの倫理ではない」,「偏狭主義を維持しているのは、この [= 女性が公共世界で余儀なくされている] 無力さであって、ケアリングではない」。「われわれは、ケアできる場所でしかケアしない」(ibid.: 188 – 189) ⁽⁷⁾。

ところで、ニーズが衝突し合う場合にはどうするか。これに対する解答は、「競合するニーズへの対応は、家庭内においてそうであるように、現地で何とか解決する (work out on site)」というものである。ここでもまた、優先順位のリストを押しついたり、恣意的なミニマル・スタンダードを設定したりしてはならない。必要なのは、「その土地その土地の条件に対応しうるネットワーク」である [ibid: 190]。

以上を要するに、「ニーズを同定し解釈するにさいして根本的に重要なのは対話、すなわちことばで伝え、耳を傾け、折り合いをつけることである」[ibid. 203]。これがオープンエンドのプロセスであるということは想像できるが、しかし、その無限プロセスの極限においては、やはり、グローバルなケアリング・コミュニティが想定されているようにみえる。「ワールドワイドに諸国民を結び合わせる自然的ケアリングのコミュニティ (communities) を築き上げることはすぐにはできそうもない」という記述は、はるか遠い将来にはそれが可能だと読める ⁽⁸⁾。

実は、ノディングズが、このような構想の具体化として思い描いているのは、小規模な制度 (総合サービス学校 (full-service school) が例示されている) を世界中に広めていくというものである (ibid.: 189 – 190)。

資金は団体 (collectives) によって提供されなければならないが、他方で、実行中のケアリング (caring-in-action) は一対一の関係 (person-to-person relations) を復帰させなければならない。ニーズを同定し充足させるべくデザインされた小規模な制度が、世界中に創設されるべきである。これらの制度は、人間の豊かさを花開かせること (human flourishing) へと方向付けられていなければならない。すなわち、これらの制度はニーズを全体として (holistically) 考慮するよう指示されていなければならない、またそれを可能にするように作られていなければならない。わたしの念頭にあるそうした制度の例は総合サービス学校である。合衆国において、都心部に総合サービス学校があれば、学問を教授するだけではなく、医療や歯科医療サービス、栄養のある食事、就学前児童や乳幼児のためのデイケア、社会福祉 (social service)、法律相談も提供することになるだろう。加えて、学校の学問的役割と関連した諸活動は、芸術、民主的に組織されたクラブ、年齢を超えた読書および討論グループ、その他さまざまなコミュニティ・サービスの機会へとどんどん広がっ

ていくだろう。

こうして、団体を仲立ちとした CRabout が一対一のケアリング関係を花開かせるための媒介となると想定されている。個々の特定のニーズではなく、ホリスティックなニーズが考慮されなければならないのは、人間としての豊かさの開花が目指されているからであると解されうる。

7

すでに紹介したように、「こどもの養育と教育はケアの倫理の要となる。なぜなら、CRfor が CRabout に先行するからであり、CRfor されることを学ぶことはこの両者に先行するからである」(Noddings 2002: 26)。あるいは、同じことだが、「CRabout することを学ぶことは CRfor することを学ぶことに依存しており、そしてそれは今度は、自分自身が CRfor されたことがあるという経験に依存している」からである (ibid.: 31)。だからこそ、CRfor されているということを学ぶことを「道徳教育の第一歩」として、CRfor の「力量 (capacity) を発達させる教育が必須」であり (ibid.: 24)、「不完全な世界において、どうすればケアする人が育てられ、教育されうるのかを考察する必要がある」(ibid.: 26 – 27)。そうして、ノディングズは、このような社会理論に「改善説的 (melioristic) であり、かつオープンである」という二つの特徴を見ている (ibid.: 27)。

それが社会改良のための健全な指針を与えるかぎりにおいて、それは改善説的であり、それが有効な理論であるためには、人間の相互行為や判断の舞台に多大な余地を残しておかねばならないがゆえに、オープンである。

言うまでもなく、教育哲学者であるノディングズにとって、一連の研究はまさしくこうした理論構築の軌跡にほかならないといえよう。

ところが、3 節の冒頭に引用したように、2010 年にスロートがとある誌上企画で、ケアリング論に突きつけたのは、「妥当とみなされる道徳性がいかにして諸個人の内に発達させられうるのか」(Slote 2010b: 128) という問いであった。スロートの見るところ、ケアの倫理もしくは感情主義には、ローレンス・コールバーグ (Lawrence Kohlberg) が展開したような「認知的発達論」に匹敵する、首尾一貫した体系的な道徳発達論、ならびにそれにもとづく道徳教育論がいまだに存在していない。

取って代わる新しい道德論を構築するにさいして、とりわけ重要な鍵概念に据えられるのは感情移入 (empathy) である。スロートによれば、これに着目することによって、「道德の内容についてよりよく理解できるようになるとともに、こどもやおとながどのようにして道德的に動機づけられているのか、どうすれば道德的に動機づけられうるのかについても、よりよく理解できるようになる」(Slote 2010b: 125) とされる。このいささか挑発的な問いかけに対するノディングズの直接の応答は、概略次の三つである (Noddings 2010b: 145 – 148)。

1. スロートによる「感情移入」という用語の採用は適切ではない。なぜなら、この言葉がもともと「投影的 (projective)」な意味合いを帯びているからである。すなわち、「自らの自我を別の人に、あるいは芸術作品に投影して、その人なり、作品を理解する」とき、その投影する力が「感情移入」なのだ。これは「感情を共有する (feeling with) 男性的なやり方」であり、ケアリングの「受容的 (receptive)」なやり方と向きが逆である。「同感 (sympathy)」のほうがよい。
2. 最近のスロート著作物からケア関連の語彙が姿を消してしまっている (ケア語で語っていない)。哲学史としてはヒュームと関連があるとはいえるかもしれないが、ケアの最初のフェミニスト的な定式化がヒュームの系譜に属しているかどうかは明瞭ではない。
3. ケアリングにもとづいた道德教育の方法は存在している。たとえば、範示 (modeling)・対話 (dialogue)・実践 (practice)・確証 (confirmation) は道德教育の四つの構成要素として実践的に活用されてきている。すなわち、教師がモデルとなって実例を示し、つねに対話しつつ考え続け、実際に一緒にやってみて、よかったところを確認して認める。

これらに対するスロートの返答、ならびにその背景にあるスロートの道德感情主義あるいは感情主義的道德教育論の体系についての検討は次稿に譲ることにして、ここではさしあたり、ほぼ時を同じくして、ノディングズが、「感情移入」を「省略表現」として条件付きで使い始めている (Noddings 2010a 11 – 12, 51 – 58) ということを記しておくにとどめ、その代わりに、ケアリング論の拡張をめぐる本稿のこれまでの議論に関わって、「感情移入」に言及しているノディングズの別の論文 (Noddings 2010c) があるので⁽⁹⁾、その論旨を確認しておきたい。

8

まさしく、「距離が重要問題である (distance does matter)」わけだが、スロートとは論じ方がいささか異なる、とノディンズはいう。ノディンズは、スロートにはない経験的事実を規範理論の与件として挙げる。

スロートは、距離が問題となるのは、それがわれわれの感情移入的な応答に影響を及ぼすからである、と説得力をもって論じる。わたしもこれに同意するが、わたしは、似た遺伝的遺産をもつ人々ともっとも密接に・容易に関係を結ぶという人間の傾向性を確証する進化生物学の研究にも注意を向けている。……いかなる規範倫理といえども、「ものごとがどうあるのか」を無視するものは真剣に受けとられる見込みは薄い。(Noddings 2010c: 11)

ただし、ただちに、「だからといって、見知らぬ人々や遠い所にいる他者にまでわれわれの感情移入を拡張することを習得することはできないのだということが含意されているわけではない」と付言されている。

次いで、「感情移入の程度あるいは強度はさまざまに異なる」とするスロートの議論に賛意を示しつつも、「考慮すべきことがもっとあり」として、決定的に重要なのは「動機づけの転移」が起こるか否かであるとされる。

距離を隔ててケアを試みるプロセスが、悲しいことだが不可避免的に、しばしば破綻するのはこの段階においてである。わたしは、どこか遠く離れた土地における貧困や不正義の犠牲者たちをとてつとて気の毒だと感じるかもしれないが、しかし、慈善組織、地域サービス、大学、その他、動物の福祉に献身するさまざまな団体からの度重なる山のような勧誘を目にするとき、そのすべてにはとても応じきれない、と結論を下さざるをえない。苦しみには同情するが、動機づけの転移を試みようとしても望みなしである。……わたしは苦しんでいる人々を直視するが、それ以上なにも為しえないということを認める。もしも、もう一伸びすれば、苦しんでいる人をもう一人だけ助けることができるとしても、列に並んでいる 2 番目の人は無視しなければならない。一人の個人としては、わたしは、すぐさま、無力な状態に至る。そして、もしも、そのプロセスがさらに十分に進行するならば、わたしは感情移入枯渇 (empathic exhaustion) に陥るかもしれない。この種の理由により、わたしは個人

の責任と団体 (collective) の責任を分離するよう助言してきた。われわれは現実世界と現実的可能性から徐々に進んでいく必要があるのだ。(Noddings 2010c: 12)

ここで指摘しておきたいのは、まず第一に、ノディングズにおける「距離」の意味の曖昧さである。もともとは対面性がケアリングの必要条件として強調されていたものが、ここではむしろ血縁性に目が向けられている。また、別のところでは、文化や伝統、規範意識の違いが、「われわれ」と「見知らぬ人々、遠くに住む人々」の「距離」として語られている。

第二に、上の引用を読むと、奇妙なことに、問題は、もはや距離（地理的距離、時間的距離、心理的距離のいずれであってもかまわない）の遠近にともなう価値割引の問題としては取り扱われていない。登場してきている例は、いずれも、キャパシティ、あるいは稀少性、あるいはコストの問題である。

たしかに、ノディングズが警告しているように、「ものごとがどうあるのか」を無視する規範倫理やその理論が真剣に受けとられる見込みは薄いだろうが、しかし、「『ものごとがどうあるのか』をどう記述し、どう説明するのか」はまさしく選択の問題であり、ゆえに真剣な検討に値する問題であろう。

【注】

- (1) まさしくこのポイントにかかわって、スロートは、「ノディングズおよびその他の論者たちが唱える種々のバージョンのケア倫理における関係性の強調はかなり誇張され and/or 一面的である」(Slote 2010c: 189) と述べ、ノディングズから逸れていっているようにも見える。はたして、スロートの感情主義は、わが国の教育アカデミズムにおけるケア（リング）熱に熱冷まし効果を発揮するのか否か、今後の課題としたい。
- (2) 1984 年に刊行されたノディングズの代表作 *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education* は、2003 年に新たな序文を付した第 2 版が、さらに 2013 年には、再度新たな序文と、書き下ろしの「あとがき」を付して、またサブタイトルを *A Feminine Approach to Ethics and Moral Education* と変更して、第 2 版アップデート版が出ている。後述するように、2003 年版への序文には、フェミニズム・ケアリング陣営の内外から浴びせられた偏狭主義との批判に対して、訂正を図ろうとしていることが記されており、また、2013 年版の「あとがき」では、ケア倫理が引き続き取り組まねばならない二つの重要な課題の一つとして、国際問題に向けてのケア倫理の拡張が挙げられている（ちなみにもう一つは検討課題は感情移入概念の取り扱いである）。
- (3) ただし、弁明用に引用されている挿話が、オリジナルはカンボジアの飢えた子供たちの話だったものが、いつのまにかアフリカの飢えた子供たちの話にすり替わってしまっている。strangers and distant others にふさわしい取り扱いだといってしまうとそれまでだが、この無頓着は何をかたっているのだろうか。
- (4) CRabout に伴う「困難と限界」は依然として生きているが、クリティカルなものとしては扱われていないようだ。もっとも、CRabout に内在する「欠陥」は、独り善がりへの傾向と、抽象化への傾向の二つとされており (Noddings 2002: 23 – 24) 、すなわち、その着手のお手軽さの問題が強調されており、かつて指摘されていた CRabout の結果の見極めがたさ、ケアの完遂の不確実性の大きさの問題から微妙に変化している。道徳判断の情報的基礎をめぐっては他の諸理論も多かれ少なかれ困難を抱えているのが実情であるが、「この CRabout がほぼ確実に、われわれの正義感覚の基盤である」(Noddings 2002: 22) とまで重視されるからには、この間の事情について知りたいところではある。また、独り善がりに陥る傾向を、あたかも物理的距離に比例するかのような記述にも違和感を覚える。
- (5) 「私たちが、靴紐を結ぼうとしている子どもを見守っているときに、自分自身の指が、共感的に反応して動くことがよくある。これこそが動機づけの転移であり、それは、私たちを動機づけるエネルギーが、他者と他者の課題に向かって流れ出すことを意味する。私は他者が伝えているものを受け取り、他者の目的や課題を助けるように対応したいと望んでいる」(Noddings 1992 [2007]: 16 [44]) 。
- (6) 他者の内面の状態、すなわち思考や感情や知覚や意図などに関して認知的に意識すること。
- (7) 「正義へのケア駆動アプローチによって集められた金は、それ自体では問題を解決しない」。だが、女性であれば、事情は変わってくるだろうというのがノディングズの推測である。その背景には、「われわれ [= 女性] は、われわれにもっとも身近な者たちをまず第一に CRfor するように生物学的にできているが、そのことはわれわれの関心がそこで終わるということの意味しない」という本質主義(?) も横たわっている (Noddings 2010a 188 – 189) 。
- (8) 試みに、これを CRfor と CRabout の区別と律儀に・整合的に理解しようとするならば、地球がたくさんのケアリング・コミュニティによって覆いつくされ、わたしはそのひとつ（ひょっとしたら、いくつか）に属しており、かつ、わたしの属していないコミュニティすべてに、わたしのコミュニティから現地駐在員が派遣されており、現地においてケアされる人々との対話を絶やさず続けているかぎりにおいて、わたしは、団体（国、NGO その他）を介して、遠く離れたところに住む人々を CRabout する、ということになろうか。だが、各コミュニティの構成員の数が対話可能な人数を下

回っていただけないので、この想定には無理がある。そもそも、対面的コミュニケーションが可能な圏域から、なぜ一足飛びに国際関係へと飛躍するのか、理解に苦しむところである。見知らぬ人々は、そんなに遠くまで行かなくても、そこらへんに大勢おり、問題を構成している。これらの問題への対処法が、国際問題のそれから類推できるとは考えにくい。

- (9) この論文も、すぐ上で紹介した感情移入という用語の採用に異を立てた論文と同じく、スロートの感情主義をめぐる別の雑誌企画に寄せられたもので、直接の名宛て人はスロートである。雑誌の発行年はいずれも 2010 年。執筆の先後については調べていないが、「感情移入」を条件付きで使っているノディングズ自身の著書 *The Maternal Factor* (2010 年刊) がリファアされているので、こちらのほうが後に書かれたものか。

【文献】

- 林泰成, 2006, 「道徳教育におけるケアリング」中野啓明・伊藤博美・立山義康編著『ケアリングの現在 — 倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて —』晃洋書房, 15 - 26.
- 川本隆史, 2004, 「ケアの倫理と制度 — 三人のフェミニストを真剣に受けとめること —」『ジェンダー, セクシュアリティと法 法哲学年報 2003』有斐閣.
- Noddings, Nel, 1984, *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*, University of California Press. (= 1997, 立山義康, 林泰成, 清水重樹, 宮崎宏志, 新茂之訳『ケアリング — 倫理と道徳の教育 — 女性の観点から』晃洋書房)
- , 1992, *The Challenge to Care in School: An Alternative Approach to Education*, Teachers College Press. (= 2007, 佐藤学監訳『学校におけるケアの挑戦 — もう一つの教育を求めて —』ゆみる出版)
- , 1999, “Two concepts of caring”, *Philosophy of Education 1999*, 36-39.
- , 2002, *Starting at Home: Caring and Social Policy*, University of California Press.
- , 2003 “Preface to the 2003 edition”, in Noddings, *Caring: A Relational Approach to Ethics and Moral Education*, xxi-xxiv.
- , 2010a *The Maternal Factor: Two Paths to Morality*, University of California Press.
- , 2010b, “Moral education and caring”, *Theory and Research in Education*, 8 (2) 145-151.
- , 2010c, “Complexity in caring and empathy”, *Abstracta*, Special issue V 6-12.
- , 2013, *Caring: A Relational Approach to Ethics and Moral Education*, University of California Press.
- ノディングズ, 2007, 「補章 ケアの倫理について (著者へのインタビュー)」佐藤学監訳『学校におけるケアの挑戦 — もう一つの教育を求めて —』ゆみる出版, 323-335.
- 押谷由夫・柳沼良太編著, 2013, 『道徳の時代が来た！ — 道徳教科化への提言 —』教育出版.
- , 2014, 『道徳の時代をつくる！ — 道徳教科化への始動 —』教育出版.
- Slote, Michael, 2010b, “Sentimental moral education”, *Theory and Research in Education*, 8 (2) 125-143.
- , 2010c, “Reply to Noddings, Darwall, Wren, and Fullwider”, *Theory and Research in Education*, 8 (2) 187-197.